

## 糸をつむぐ

丸田兼義

「大島紬」を、手にとって見たことがありますか。大島紬とは、鹿児島県の奄美大島を中心に作られている伝統的な着物の生地のことです。軽くて丈夫な上に飽きの来ないデザインは、親子三代にわたって着られるといわれるほどです。

およそ千三百年の歴史をもつといわれる大島紬。この大島紬の発展の陰に、一人の人物の存在がありました。その人物の名は、丸田兼義。大島紬を全国に広め、その制作技術の向上に努めた、「大島紬育ての親」と呼ばれる偉人です。



【大島紬】



【丸田兼義】

(本場奄美大島紬協同組合百周年記念誌より)

兼義は、江戸時代の終わり頃の1857年（安政四年）、奄美大島の名瀬（現在の奄美市）に生まれました。父親は兼義が四歳の時に亡くなり、母親一人に育てられました。裕福な家庭ではなく、十分な教育も受けられませんでした。兼義は手先がとても器用で、また、やり始めたことは最後までやり通す、粘り強さのある子どもでした。

兼義が成長して青年となった明治時代、奄美大島の人々の暮らしは、サトウキビの収穫に支えられていましたが、サトウキビの栽培は気候に左右されて台風などの被害も大きく、決して楽なものではありませんでした。

【関連年表】

- 1857年 誕生
- 1890年 第三回内国勸業博覧会開催。
- 1901年 大島紬同業組合設立。
- 1903年 第五回内国勸業博覧会開催。
- 1910年 県知事賞受賞。
- 1921年 農商務大臣賞受賞。
- 1958年 死去

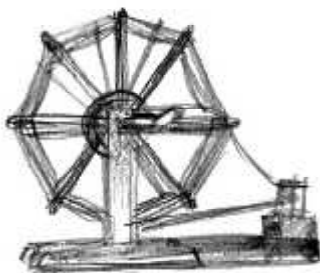
一方この頃になると、ほんの少しずつですが大島紬も商品として作られ始め、やがてその紬を買い取って大都市の市場へ売り出そうと、島外からの商人がやって来るようになりました。気候に左右されるサトウキビだけでは島の人々の暮らしは維持できないと危機感を持っていた兼義は、その様子を興味深く見つめました。紬は島の産業として成り立つのではないか、島の人々の暮らしを支えられるのではないかと考えたのです。

しかし、その頃の紬は、古くからのやり方のままで作られており、ほとんど改良が加えられていませんでした。また、その紬を買い取ったという人も少なく、紬の値段を安くしなければならなくなってしまいました。

#### 【紬の歴史】

一七二〇年（享保五年）の文献に、「紬」が登場する。

今から約三百年前に、すでに大島紬が奄美大島の人々の間に普及していたことが分かる。



「どうすれば、大島紬の素晴らしさをもっと広められるだろうか。」

島の一大産業に発展させるにはどうしたらよいだろうか。」

兼義は島の明るい未来を思い、このことを考え続けました。

そこで、兼義はまず、紬の研究開発に取り組みました。

「新しい時代の人に好まれるような、新しい柄（模様）を考えよう。」

作り方を様々に変えながら、今までにない柄を作り出し、新しい

紬を生み出そうとしたのです。

新しい柄を考えては失敗し、また新しい柄を考えることに挑戦

するということが、毎日繰り返し返されました。子どもの頃からの手先

の器用さも、兼義の助けとなりました。

紬の仕事は必ず島の産業として立派に成り立つだろうという考

【大島紬の製造工程】

① 柄の設計

② 糸くり（糸の準備）

③ のりはり（のりつけ）

④ しめばた（模様作り）

⑤ テーチ木・泥染め



【泥染めの様子】

⑥ しめとき・織り準備  
⑦ はた織り



【はた織りの様子】

⑧ 検査

えは、紬の研究開発に取り組むことで、より一層確かなものとなつていき、さらに兼義は、近所の人々に声を掛けながら、この考えを周りにも広めていきました。

一八九〇年（明治二十三年）、大島紬を全国に知ってもらうチャンスがやってきました。※第三回内国勸業博覧会が、東京の上野で開かれたのです。この機会を逃してはいけないと、兼義は紬を出品しました。大島紬の存在を全国にアピールしようと考えたのです。

兼義が出品した紬は、当時の紬としては※かすり模様がより細かく織られており、大好評で迎えられました。その後、紬の販売先は一気に関東にまで広がりました。兼義のねらいは、見事に当たつ

#### 【内国勸業博覧会】

産業の育成を目的として、国内で生産される物品を展示する博覧会。

#### 【かすり模様】

とどこころにおいて「かすった」ように織られた模様のこと。

たのです。この時、兼義は三十四歳。販売先が広がったことで、ようやく紬も、納得なつとくできる値段で売れるようになっていきました。

次々と集まるようになった注文を、兼義は決して一人占めひとりじめしませんでした。紬を作っている友達ともだちや知り合い、また、新しく始めようとする島の人たちに、自分の技術を教えた上で、受けた注文を分けていったのです。そうしているうちに、紬を作る人たちが競い合きそって柄などを工夫くふうするようになりました。紬の仕事をする島の人たちみんなで栄えさかたいという兼義の願ねがいが、叶かなえられつつあったのです。

一八九二年（明治二十五年）頃には、大島紬の名前は全ぜん国こく的に知しられるようになり、販売先もさらに広がりました。



【調べてみよう】

このような考えは、「結むすいの精神せいしん」とも呼ばれる。「結むすいの精神せいしん」を調べてみよう。

ところが、状況は一変します。奄美大島の中でも紬作りは産業として認められ、更に発展しようとしていたその矢先、大変な事が起きてしまいました。一部の人達が、本来の作り方を守らないで紬の品質を落とし、その分たくさん作って売ろうとしたのです。

しかし、それでは大島紬の信用が失われてしまいます。清く正しいことを誇りとする兼義は、紬の品質を守ろうと、質の悪い製品を作る人たちを説得して回りました。

「一部の製品のために、大島紬全体の評判を落としてはならない。せつかくここまで発展してきた紬作りを、守らないといけない。」

なかなか話を聞いてくれない人たちに対し、兼義は根気強く説得を続けました。

一八九七年（明治三十年）頃には、大島紬は奄美の經濟けいざいの中心となっていました。以前いぜんからの悪事は、まだ一部で続いていました。

そこで兼義たちは、紬の※組合くみあひを作ること考えます。「本物の大島紬を守り、みんなですらに発展していこう。」という思いからでした。

けれども、組合くみあひは簡単かんたんにはできませんでした。「組合が何の役に立つのか。」と非難ひなんされたり、「自分たちのためだけに作ろうとしているのだろう。」と、陰かげで悪口を言われたりしました。

みんなを説得するために、兼義たちは福岡ふくおかや久留米くろみに渡りわた、そこにある組合がどんな活動をしているのかを勉強しました。そして島

【組合】

共同きょうどうの目的もくてきを果たすために、一定の資格しかくのある者で組織そしきする団体だんたい。



に帰ると、今まで以上に力を入れて、組合がなぜ必要なのか、組合で何ができるのかを、寝る間も惜しんで説得して回りました。

努力は報われ、一九〇一年（明治三十四年）、ついに大島紬同業組合が結成されます。組合が行った厳格な製品検査は、紬全体の品質を守る効果を生み、こうして大島紬の評価は、全国で更に高まっています。その後、兼義の功績に対して、数々の賞が贈られています。

一九五八年（昭和三十三年）五月、兼義は百二歳という長寿を全うし、静かな眠りにつきました。

現在の奄美市にある高千穂神社には、丸田兼義の様々な功績を称



【高千穂神社】



える石碑が置かれています。兼義は生前、奄美をよくしたい、人々の心を清く正しいものにしたいたいという思いを胸に、高千穂神社の建物を立派に改築することにも関わっていたのです。

小学校五・六年生を対象に、奄美群島広域事務組合が、毎年行っている「夏休み一日袖体験バスツアー」では、まず、この高千穂神社に立ち寄ります。大島袖の名前を全国に広め、奄美に大きな夢と希望をもたらした丸田兼義に、変わらぬ感謝の気持ちをささげるためなのです。

【丸田兼義翁頌徳碑】



【考えてみよう】

あなたは、兼義のどんなところを、凄くと思うだろうか。